

アメリカ人たちが語ったフィリピン革命

——帝国支配の正統性とのほざまで——

永野 善子

はじめに

東南アジアに位置するフィリピン諸島は16世紀半ばからスペインの植民地支配下に置かれていたが、19世紀後半になるとイギリスを先頭とする世界経済の一環に組み込まれて社会経済構造が大きく変化していった。そうしたなかで植民地体制に対する改革運動が台頭し、1896年8月にはマニラで革命組織カティプーナが武装蜂起し、フィリピン独立革命が勃発した。これを機に、マニラと周辺諸州で革命軍とスペイン軍との戦いが始まったが、なかでもカビテ州で町長の職にあったエミリオ・アギナルドの勢力が優勢となった。ところが同年10月にスペイン本国から3万の軍隊が到着すると、戦局は一変して不利となり、スペイン軍による弾圧が強化された。戦線不利とみたアギナルドは、1897年12月にスペイン軍とビヤクナバト協約を結び香港に逃亡した。この間革命軍は中央指導部不在のまま勢力を盛り返し、ルソン島諸州で戦いを続けた。

さらに1898年4月になると、米西戦争の勃発によって、独立革命は新しい局面を迎えた。アメリカはキューバをめぐるスペインに宣戦布告し、フィリピンにデューイ提督指揮下の軍隊を送ったからである。そこでアメリカの支援によって力を得たアギナルドは再び革命軍の指揮をとるために亡命先から帰国し、同年6月にカビテ州で独立宣言を行い、革命政府を樹立した。しかし、アメリカ軍は同年8月に単独でマニラを無血開城し、フィリピン全土をその指揮下に置くと宣言した。続いて12月にはパリでアメリカとスペインの間で和平条約が締結され、これによって国際法上フィリピンはアメリカの領有するところとなった。

ところが、この間にアギナルドの革命軍はその勢力範囲を拡大し、1898年9月にはブラカン州マロロスで革命議会が開かれ、憲法制定作業が進められた。こうして、1899年1月にマロロス憲法が公布され、第一次フィリピン共和国が誕生した。しかし、この間に革命軍とアメリカ軍との関係は悪化の一途をたどり、1899年2月にフィリピン・アメリカ戦争の火蓋が切って落とされた。アメリカ軍はゲリラ戦で苦戦を強いられながらも、大量の武器・弾薬を投入して革命軍を鎮圧し、1902年2月に平定作戦終了を宣言するにいたった（池端・生田1977：66-87；永野1995：12-14）⁽¹⁾。

以上は、フィリピン独立革命の勃発からフィリピン・アメリカ戦争終了前後までの、いわゆる「フィリピン革命期（1896-1902）」の概要である。ところでフィリピン近現代史におけるこの激動の時期を同時代のアメリカ人たちはどのように叙述していたのだろうか。帝国としてのアメリカは恩恵的同化政策⁽²⁾のもとでフィリピンを植民地化するにあたって、その正統性をどのように確立していったのだろうか。本稿では、この問題にひとつの解答を得るために、第1節で、アメリカ軍が押収した通称「フィリピン革命文書」のゆくえとその編纂にあたったジョン・R・M・テイラーによるフィリピン革命に関する記録史集の出版が頓挫した背景を明らかにする。ついで第2節では、ジェームズ・A・ルロイが著した二つの書物を手掛かりとして、ルロイのフィリピン革命についての見解を吟味し、彼がテイラーの記録史の出版に異を唱えた理由について検討する。さらに第3節では、テイラーによるフィリピン革命の記録史集の特徴をたどりながら、ルロイとのフィリピン革命へのまなざしの相違を浮き彫りにしたい。

1. 通称「フィリピン革命文書」とジョン・R・M・テイラー

アメリカ軍は、米西戦争とのからみでフィリピンに軍事介入して以降、フィリピン革命政府や革命軍の命令書、通信文書、作戦記録など約20万点の膨大な史資料を押収し、それをもとに戦闘状況の推移を記録し分析した。その文書コレクションの正式名称は、“Philippine Insurgent Records, 1898-1901, with Associated Records of the United States War Department, 1900-1906”であり、通称「フィリピン革命文書」として知られている (Taylor 1971: vol. 1, 1; 池端 1994: 135; 上野 2015: 12-14)。

このコレクションの正式名称の冒頭分の“Philippine Insurgent Records”を邦訳すると、「フィリピン反乱文書」となり、フィリピン国立図書館のカタログでは現在にいたるまで“Philippine Insurgent Records: PIR”として登録されている⁽³⁾。しかし、この文書コレクションは、アメリカ軍に対する単なる反乱ではなく、フィリピンの独立と自己防衛の戦いの記録として、今日、フィリピンの歴史学者の間では“Philippine Insurgent Records: PIR”ではなく、学術的には“Philippine Revolutionary Records: PRR”、すなわち「フィリピン革命文書」と呼ばれることが多い (Scott 1984: 33-34; “Virtual Philippine Revolutionary Records” 2017)。

他方、アメリカでは、「フィリピン・アメリカ戦争」は長らく“Philippine Insurrection”、すなわち「フィリピンの反乱」として扱われてきたが、フィリピン人やアメリカ人歴史学者たちの主張に応じて、米国議会図書館は“Philippine Insurrection”として登録されてきた参考文献の分類名を1999年に“Philippine-American War (1899-1902)”に変更した (“Philippines (05/07)” 2017)。この間のこうした動きは、フィリピン革命期を扱うフィリピンやアメリカの歴史学者たちのまなざしの変化として理解できよう。

ところで、今日、「フィリピン革命文書」と呼ばれる膨大なコレクションに含まれる史資料はどのように編纂されて、ひとつのコレクションを形成するようになったのだろうか。アメリカ軍に押収された史資料は、どのようなプロセスをへて第二次世界大戦後フィリピンに返還されたのだろうか。こうした疑問に答える文献として、「フィリピン革命文書」をフィリピンに返還する前に米国国立公文書館がマイクロフィルム化し、その作業に付随して作成された手引書がある (U.S. National Archives and Records Service 1967)。

同手引書などによると、1899年に米国陸軍大尉ジョン・R・M・テイラー (1865-1949)⁽⁴⁾が情報将校としてマニラに着任すると、軍政長官エルウェル・S・オティスはフィリピン革命軍から押収した文書を整理し、重要文書を翻訳して米国陸軍省と米国連邦議会上院に提出するよう指示した。テイラーは1901年にアメリカに帰還すると、米国陸軍副官総監から陸軍省とフィリピン問題を担当する上院議員との間の連携役の任務を受け、陸軍省島嶼部局 (Bureau of Insular Affairs: BIA) に配属された。1902年にテイラーはアメリカ軍が押収したフィリピン革命軍関係文書をもとにした記録史集の刊行案を陸軍長官に進言したところ承認され、全押収文書がマニラからアメリカ本国に移送されることになった。この結果、当初、マニラのアメリカ軍司令部が管理していた重量3トンにも及ぶ押収文書は、米国陸軍副官総監部を経て、1902～1906年にワシントンの陸軍省島嶼部局管理下に置かれた (Ibid.: 1-3; Farrell 1954: 390, 405)。

この間にテイラーは「革命文書」部の数人のチームスタッフとともに押収文書のなかからフィリピン革命軍の動向の変化を追跡するうえで重要となるスペイン語やタガログ語の文書を選別し、スタッフの協力を得て翻訳した⁽⁵⁾。そして同史資料や刊行文献をもとにして、アメリカ軍に対するフィリピン革命軍の抵抗の記録史集をまとめ、政府出版局が活字組版した校正刷りを1906年夏に米国陸軍長官ウィリアム・ハワード・タフトに提出した。ところが、タフトは米国連邦議会選挙の前にこの記録史は出版すべきでないとの判断を下したうえ、記録史からテイラーの見解を削除すべきとの見解がほかの政府関係者たちからも出されたため、記録史集の出版は頓挫した。1906年9月にテイラーはこの任務を解かれて原隊に復帰し、「革命文書」部が解散されたのである (U.S. National Archives and Records Service 1967: 2, 11-13; Farrell 1954: 391-394)。

テイラーの記録史集がアメリカで日の目を見ないなかで、フィリピン側から「革命文書」の返還を求

める要望が動き出した。1916年に新たにフィリピン国立図書館兼博物館長に就任したテオドロ・M・カラウは、ワシントンのフィリピン駐米代表委員を通して、フィリピンが独立したときには「革命文書」を同国立図書館兼博物館に返還するよう要請した。1925年にはカラウ自身が第3次フィリピン独立使節団の一員としてワシントンの島嶼局を訪ね、「革命文書」を閲覧する機会を得ている。さらにフィリピン・コモンウェルス（独立準備政府）が発足した翌年の1936年にワシントンのフィリピン駐米代表委員が「革命文書」の返還を要望したが、同文書はフィリピンがアメリカから正式に独立したのちに返還が検討されるとの返答を受けた。1941年にフィリピン国立図書館長が同様の要望を再び行ったところ、同様の返答を受けたという（U.S. National Archives and Records Service 1967: 13-16）。

この間に「革命文書」の管理は、1939年の島嶼部局改組を前にして、その前年にいったん同担当局から陸軍副官総監部に移され、1940年に米国国立公文書館に移管された。第二次世界大戦後の1948年からは閲覧の許可権を陸軍省が維持したうえで同公文書館が管理するようになり、1953年には同文書に対する閲覧制限が解除された。そして1946年に独立したフィリピン政府は、その10年後の1956年に「革命文書」の返還に対して再び強い関心をもったため、米国国務省が同文書の返還について検討し、陸軍省などからの賛同も得て、返還に応じることになった。こうして1957年に米国連邦議会で「革命文書」のフィリピン政府への返還法案が可決され、米国大統領によって承認されたのである。その後、「フィリピン革命文書」は米国国立公文書館でマイクロフィルム化され、マイクロフィルム643巻とともに「革命文書」がすべてフィリピン政府に返還される運びとなった（Ibid.: 16-19）。

なお、テイラーによるフィリピン革命の記録史集の出版が差し止められた背景を突きとめるために、アメリカ人歴史家でアメリカ・カトリック大学教授のジョン・T・ファレルは「フィリピン革命文書」の閲覧制限が解除される前の1950年初頭にアメリカ国立公文書館で史料調査を行っている。「フィリピン史への放棄されたアプローチ——ジョン・R・M・テイラーとフィリピン反乱記録」と題され、1954年に発表されたファレル論文は大いに注目され、フィリピン政府が「フィリピン革命文書」返還へ動きを再び強めるきっかけにもなったという（Ibid.: 2, 17; Farrell 1954: 385）。以下、ファレルの史資料調査で明らかになった点をまとめてみよう。

テイラーがまとめたフィリピン革命の記録史集は、テイラー自身が執筆したフィリピン革命軍の展開の歴史と英語に翻訳された重要史料集全5巻から成る。テイラーはそのすべての原稿を1906年3月に完成し、1000部印刷される予定で活字組版された校正刷りが同年夏に陸軍省島嶼部局に届けられ、そのうちテイラー自身が執筆した革命軍の展開史の部分の校正刷りが当時、陸軍長官を務めていたウィリアム・ハワード・タフトに届けられた。タフトは、1901～1904年にアメリカ統治下のフィリピン政府機構を整えるために組織されたフィリピン委員会委員長として、フィリピン政府初代民政長官を務め、フィリピンから帰国後の1904～1908年には米国陸軍長官の任に就き、1908年には米国大統領に当選した人物である。タフトの島嶼部局長代理フランク・マッキンタイヤーへの返答は、校正刷りを読んだものの、必要だと考える修正を加えるにはもう少し時間が必要だとするものであった。さらにその書簡の追伸には、もしフィリピンのスペインおよびアメリカに対する革命の歴史が5巻本として1906年に出版されていたら、それがアメリカの政治情勢にどのような影響を与えたかという疑問までも提起されていたという（Ibid.: 392-396）。

こうして記録史集刊行のための強力なスポンサーを失ったテイラーは失意のうちにワシントンを去ってアメリカ西海岸の部隊に移り、その後記録史集刊行についてみずから動くことはなかった。他方、その校正刷りを保管する政府出版局側は、1908年にその刊行の機会を探るため島嶼部局長クラレンス・エドワーズに対し、タフトに代わってフィリピン民政長官を務め、その後陸軍長官となったリュック・E・ライトに働きかけるよう要請した。しかしエドワーズはこの要請に直接応えるのではなく、部下のマッキンタイヤーに対し、フィリピン事情に精通していたジェームズ・A・ルロイ（1875-1909）⁶⁾にテイラー自身が執筆した記録史の校正刷りを送り、批判的コメントを送ってくれるよう要望したのである（Ibid.: 396-398）。

ルロイ自身、ミシガン大学卒業後、同大学元教授で動物学者のディーン・C・ウースターがフィリピ

ン委員会委員に就任したときにその秘書官としてフィリピンに同行した。その優秀さゆえにルロイはその後、陸軍長官タフトの専属秘書として、フィリピン統治機構の立ち上げのためにフィリピン人エリートとの交渉にあたった。ルロイ自身、アメリカ軍のフィリピン革命軍との戦いの史実を大部な著作としてまとめており、この意味で、ルロイは、テイラーに対してフィリピン革命史の著述家として対抗関係にあったとみることもできよう。ファレルの史料調査によれば、ルロイが島嶼部局側に送ったとされる批判的コメントはアメリカ国立公文書館のファイルには残されていないが、テイラーの記録史集の刊行中止が決定されるうえできわめて重要な役割を果たしたとされている。こうして1909年に島嶼部局は次期大統領タフトの秘書からテイラーの記録史集に対するルロイの批判がタフトに送られたとの情報を受けたことにより、同局長エドワーズはテイラーの記録史集の刊行中止を正式に決定したのである (Ibid.: 398-404)⁽⁷⁾。

なお、政府出版局は校正刷りの幾ばくかの増刷がその後認められたものの、その送付先に関する正確な情報は残っていない。ファレルによれば、①米国国立公文書館、②米国議会図書館、③ミシガン大学図書館、そして④国立戦争大学で校正刷りが保管するほか、アメリカ統治時代にフィリピン治安警察軍本部とフィリピン政府公文書館に各1セットが送られたという (Ibid.: 404)。

次節では、テイラーの記録史集への違和感を抱いたジェームズ・ルロイによる二つの著書からそのフィリピン革命史観を浮き彫りにし、アメリカがフィリピンの植民地化を正当化するひとつの道筋を探ることにしたい。

2. ジェームズ・A・ルロイの歴史叙述

ジェームズ・A・ルロイが遺した二つの著書とは、『フィリピンの都市と農村の生活』(LeRoy 1905)と『フィリピンにおけるアメリカ人——征服と占領初期の歴史、スペイン統治の概要付』(LeRoy 1914/1970)である。

まず1905年に出版された『フィリピンの都市と農村の生活』から検討すると、本書は文庫本よりやや大きめの四六判で310頁ほどの小著である。全10章から成り、その構成は、「第1章 序論：視点」、「第2章 人種の起源と混血」、「第3章 フィリピンの典型的なコミュニティ」、「第4章 マニラとその他の都市市民」、「第5章 フィリピンの宗教と宗教問題」、「第6章 カシキズムと地方自治」、「第7章 教育と世論」、「第8章 部族および地理的要因による分裂傾向」、「第9章 貿易と国内発展」、「第10章 フィリピン人と東洋」となっている (LeRoy 1905: vii-viii)。この構成から、本書は、ルロイがアメリカのフィリピン統治期初期にフィリピン委員会委員のウースターの秘書や初代民政長官の個人秘書として数年間フィリピンに赴任する間に得たさまざまな情報やフィリピンに関する文献などによって得た知見に基づいて、当時、アメリカでは得られなかったフィリピン事情を一般の人々に伝えるためにまとめた評論といえよう。

ルロイは、「第1章 序論：視点」で本書執筆の意図を次のように語っている。すなわち、当時、アメリカでは「フィリピン問題」といわれた、フィリピン領有とその扱いについて賛否両論が展開され混乱状態にあった。とりわけアメリカの「反帝国主義同盟」⁽⁸⁾はアメリカのアジアにおける植民地獲得に異議を唱え、フィリピン人による共和国に共鳴する立場から、フィリピン人はひとつの独立国家を維持することができるとの見解を展開していたからである (Ibid.: 1-4)。

こうした混乱状態を解決するために、ルロイは、第1にスペイン統治のもとでキリスト教化されたフィリピンの歴史と社会について正しい知識をもつことを肝要とする。そして、第2には、スペイン統治下のフィリピン社会では教育と社会的地位を保証される人々はごく一部であり、彼らはヨーロッパやほかのアジア人との混血である場合が多い。他方、大衆はスペイン人神父のもとでカトリック教化されただけにすぎず、教育を受けていない。したがって、第3として、本書では、フィリピンの伝統的な指導者層ではなく、大多数の「無知な農民層」を中心にフィリピン社会を描くことが重要であるという (Ibid.: 4-13)。

ルロイは、以上の問題意識を踏まえて各章の議論を進め、最終章の「第10章 フィリピン人と東洋」では、彼がスペインの植民地支配を受けたラテンアメリカやカリブ海の地方有力者の呼称として使用される「カシケ」という用語でフィリピンの指導者層を呼びながら、彼らが大多数の「無知な農民層」を統率する能力をもつのか否かについて次のように述べている。

……フィリピンの主要な指導者たちは、教育を受けた大衆がどのようになり得るかの例として、また彼らの人々の願望を証言する者として、その人々を誤って表現している。これらの人々は、西洋の社会的および政治的制度を求めている。彼らは自分たちの人々の代弁者として拒絶されるべきなのだろうか？

もしその問いに対する答えが「いいえ」であるとしても、逆方向に極端に振れる危険も無視できない。……いかなる政策も、それがカシケ階級のフィリピン人によって完全に構想され実行されるものであれ、または支配的人種の人々がカシケ階級の助けを借りて策定するものであれ、フィリピンの社会的状況におけるこれらの実際の欠陥を適切に考慮しない限り、成功することはできない。フィリピン人自身がよく理解し、時に口にするように、フィリピン人自身による統治は、フィリピン人のために部分的に設計され、上から課されたいかなる政府よりも優れていると仮定するのは、印刷された文章としてはもっともらしく見えるかもしれないが、実際にはうまくいかないだろう (Ibid.: 298-299)。

すなわち、ルロイは、20世紀初頭のフィリピンでは現地のエリート層が自治政府を維持することは困難であるとの見解をもっており、このことは「反帝国主義同盟」の主張に意義を唱え、アメリカ政府によるフィリピン統治を正当化することになる。ルロイの没後1914年に出版された大著『フィリピンにおけるアメリカ人』は、こうした彼の政治的立場からスペインとアメリカに対するフィリピン革命軍の戦いを描いたものである。

本書は2巻本で、第1巻が420頁余、第2巻が350頁から成る大部な著書である。第1巻は、はじめにスペイン統治時代の歴史を素描し、1896年に対スペイン独立革命が起きた背景について述べたうえで、1898年の米西戦争勃発によるアメリカの介入以後のスペイン軍との戦いやフィリピン革命政府との交渉過程を扱っている。その構成は、ウィリアム・H・タフト自身による「序文」とミシガン州の地方新聞編集者ハリー・コールマンによる「伝記的素描」のあとに、「第1章 スペイン統治時代——3世紀にわたる序章」、「第2章 自治体の再編成」、「第3章 スペインへの反乱——人種戦争」、「第4章 アメリカの介入」、「第5章 アメリカの意図へのドイツの関心」、「第6章 「脅し」によるマニラ占領」、「第7章 フィリピン人の組織化」、「第8章 意見の不一致への漂流」、「第9章 パリ条約」、「第10章 相互不信」、「第11章 軍事外交」と続く。

ついで第2巻は1899年のフィリピン・アメリカ戦争の勃発から1900年を通してのアメリカ軍による革命軍の制圧過程を克明に追跡したものである。本巻からアメリカ軍がフィリピン革命軍に対して、当初予想していた以上の苦戦を各地で強いられた状況が明らかにされており、その構成は以下のとおりである。「第12章 武器に訴えるフィリピン人」、「第13章 アメリカ軍がマロロスを制圧」、「第14章 軍の再編成——アメリカ司令官に強要された部隊」、「第15章 島間貿易」、「第16章 フィリピン側の不和」、「第17章 1899年の中央および南部の島々」、「第18章 フィリピン「政府」と神出鬼没の軍隊」、「第19章 軍事行動」、「第20章 ロートンの最後の「偵察」」、「第21章 ゲリラ戦」、「第22章 コッベとヒューズとともに」、「第23章 作戦の性質の変化」、「第24章 ゲリラ戦術と組織」、「第25章 無駄な平和交渉——フィリピン側の態度」、「第26章 アメリカの約束と実践」、「第27章 宗教問題」。

なお、末尾にはルロイによる未整理のリストから作成されたとされる「参考文献一覧」が付されている。この「参考文献一覧」と全章にわたって丁寧に示されている引用注記から、ルロイは、本書をまとめるにあたっては、米国連邦議会やアメリカ軍関係などの膨大な刊行・未刊行文書を渉猟したほか、こ

く一部ではあるがアメリカ軍が押収したフィリピン革命軍関係の文書にも目を通していたことがわかる。

ところで、フィリピン革命軍や革命政府について、ルロイはどのような見解をもっていたのだろうか。以下に引用する「第7章 フィリピン人の組織化」のいくつかの文章から、ルロイは、フィリピンのエリート層が創り上げようとしていた革命政府（マロロス議会）は一般大衆を代表したのではなく、地方政府を含む組織形態はスペイン植民地期と同様の古い体質のままであったと考えていたことがわかる。

……革命は下から組織されたのではなく、上から押しつけられたものであった——ただし、ここではひとまず市民による政府の運営機構に関してのみ述べており、大衆が自発的に軍務に志願したのか、それとも強制されたのかという問題は脇に置いておく。その運動の自発性にいくらか疑問があるからこそ、それを推進した人物やその人格を明らかにし、彼らがどの程度「代表的な存在」であったのかを問い直すことが重要となる（LeRoy 1970: vol. 1, 280）。

……アギナルドはその支配力を示したが、それは完全に疑いのないものではなかった。とくに後になって、革命がより広範な人々や領土を含むようになってからは、なおさらであった。アギナルドのもとでは、えこひいきや縁故主義の影響が再び働いていた……（Ibid.: vol. 1, 287）。

議会それ自体についていえば、それは本来の意味での「代表制」を体現しているとはいえなかった。というのも、その構成員たちは民意によって選ばれた者たちではなかったからである……（Ibid.: vol. 1, 288）。

そのように行われた選挙は、関係する人々の自由な選択を表していたとは言い難く、むしろ以前スペイン人の修道士や州知事の指示によって行われていた選挙と大差なかったことを示す証拠が数多く存在する。役人の名称がいくつか変更されたにすぎず、市町村および州の統治制度は単にそれまで存在していた制度が継続されていて、これは1893年のマウラ法に従ったものであった（Ibid.: vol. 1, 304-305）。

こうした見解のもとに、ルロイは、本書の最終章である「第27章 宗教問題」で、次のようなフィリピン委員会の方針を強く支持するのである。

政策の変更によって島々をタガログ人政治家の小集団に引き渡すことは、十分な見込みがある大きな改善を台無しにし、資本を逃避させ、生命と財産——世俗的なものであれ、宗教的なものであれ——を非常に不安定にするだろう。厳しい弾圧への恐れから、自国民には今のところ自治の能力がないという確かな信念のもとでアメリカ人を支援してきた保守的なフィリピン人の多くを追放することになるだろう。そしてそれは、マロロス政府の8カ月間の支配下にあったすべての州で見られた抑圧と腐敗を再びもたらすだろう。その結果、嫉妬深い指導者たちの間で派閥争いが起り、混乱と無政府状態が生じ、我々の政府、あるいは他の何らかの政府の積極的な介入を必要とし、またそれを正当化することになるだろう（Ibid.: vol. 2, 311）。

かくしてルロイの大著『フィリピンにおけるアメリカ人』は、アメリカ統治のもとでフィリピンにおける自治政府を形成することの正統性を確認し、1909～1913年に米国大統領を務めたタフトの序文付で1914年にボストンの出版社から刊行された。他方、ジョン・R・M・テイラーによるフィリピン革命の記録史集はアメリカで未刊行に終わったものの、フィリピン人研究者たちの努力の末、ようやく1971年になってからマニラ首都圏で出版に漕ぎつけることになった。次節では、テイラーがその記録史集によってフィリピン革命をどのように見つめていたのか検討することにしたい。

3. ジョン・R・M・テイラーのまなざし

『フィリピンの対米反乱——注釈と序文を付した資料集』と題するジョン・R・M・テイラーによるフィリピン革命の記録史集のフィリピンにおける出版は、国家科学開発委員会の協力のもとでユーヘニオ・ロペス財団のフィリピン歴史シリーズの最初のプロジェクトとして企画された。この企画委員会の委員長は、フィリピンの著名な歴史・社会評論家であり、ロペス記念博物館初代館長のレナト・コンスタンティーノが務め、プロジェクト全体の編集および監修を担当した。同委員会のメンバーとして、フィリピン革命史研究の泰斗テオドロ・アゴンシリョなど錚々たる研究者が名を連ねた。全5巻からなる本書は、1971年に第1巻が刊行されたあと、残りの4巻の刊行が完了したのが1973年で、全巻の完了に4年の歳月が費やされた (Taylor 1971: vol. 1, xiii)。

全巻の編集に尽力したレナト・コンスタンティーノは、第1巻に「偏った資料から見える歴史的真相」と題する序文を寄せ、本書をフィリピンで刊行する意義を鋭利な筆致で著している。コンスタンティーノは、テイラーの「フィリピン革命文書」編集の役割やテイラーによるフィリピン革命の記録史集がアメリカで未刊行に終わった背景を本稿第1節で紹介したジョン・T・ファレル論文などを引用して解説したあと、テイラーのフィリピン革命に対する見解に対して、次のような興味深い評価を示している。

テイラーの歴史は、アメリカの視点を反映しているとはいえ、当時としては確かに議論を呼ぶものであったかもしれない。一方で、それはフィリピン独立運動を抑え込む任務を与えられたアメリカ人たちの戦術や目的に関するデータを提供していた。フィリピン人の友人というイメージとは裏腹に、実際には抜け目のない、先見の明をもつ帝国主義者であったタフトは、アメリカの本当のフィリピンに対する意図をあまりにもはっきりと暴露している部分を「修正」したいと考えたかもしれない。他方で、テイラーの歴史は、スペインに対するフィリピン革命やアメリカへの抵抗運動を指導した一部の指導者たちについて、不快な真実を明らかにしていた (Constantino 1971: vol. 1, xi)。

テイラーの反フィリピン的な偏見や彼の著作が執筆された状況は、彼の仕事の価値を損なうものである。しかし、彼が一次資料に直接アクセスできたことは、ほかの人々には得られない貴重な情報を彼にもたらした。このことによって、フィリピン革命の指導者たちの動機や行動について、真剣に研究するに値するような洞察を得ることができた (Ibid.: vol. 1, xii)。

ここでコンスタンティーノは、強い反米思想のもとフィリピン・ナショナリズムを訴え続けた論客としての立場からテイラーの歴史記録に批判的な見解を表明しつつも、それがアメリカ人の見解であるからとして簡単に退けることはしていない。むしろテイラーがフィリピン革命軍に関する一次資料を渉猟したことによって、ほかのアメリカ人からは得られない見解が提示されていることを大いに評価している。この点は、コンスタンティーノが次のようにファレル論文を引用していることから知ることができよう。

1914年に出版されたルロイの著作とテイラーの歴史を比較する機会をもった者にとって、フォート・バヤード病院の病人(ルロイ)が1908年12月に原資料に基づいた記述を読んだとき、自分自身が書いていることと大きく食い違っているのに相当な衝撃を受けたに違いないことは明らかである。というのも、彼の著作は主としてアメリカおよびスペインの公刊文献、とくに政府関係者の報告書と彼自身のフィリピン人との直接的な体験に基づいていたからである (Ibid.; Farrell 1954: 401)。

なお「編集者注記」によれば、コンスタンティーノを主幹としてテイラーの記録史集をフィリピンで刊行するにあたり、新たに印刷業者向けに原稿を作成する必要があったが、彼らが利用した校正刷りは二通りあった。ひとつはアテネオ・デ・マニラ大学リサール図書館が所蔵するマイクロフィルムの拡大印刷版であり、もう一つは歴史家テオドロ・アゴンシリョが個人的に保管していたマイクロフィルムであった。前者は、おそらく最初の校正刷りのコピーとされ、セクション全体が誤って配置されているなど、多くの誤りがあったという。他方、アゴンシリョのコピーは、より後に作成された校正刷りのマイクロフィルムで、前者のコピーでみられた多くの誤りがテイラー自身による余白の書き込みで修正されていた。アゴンシリョのコピーの第1巻の表題の頁には「3刷」と書き込まれていたことから、これをテイラーの記録史集の校正3刷とみなし、今回の印刷版の最終的な基礎資料として使用したという(Taylor 1971: vol. 1, xiii)。

こうしてテイラーの『フィリピンの対米反乱』全5巻は、1906年にアメリカの首都ワシントンの政府出版局で活字組版した校正刷りが作成されて以来、65年以上の歳月を経てひとつのまとまった刊行書として日の目を見ることになった。全5巻のうち第1巻前半部と第2巻にはテイラー自身が執筆した歴史叙述があり、第1巻後半部と第3～5巻はテイラーとそのチームスタッフが選別し英訳した文書の英訳集となっている。第1巻と第2巻がそれぞれ500頁を超え、第3巻が670頁余、第4巻が800頁余、そして第5巻は本体が800頁余であるが、末尾に第3巻の追加分として120頁が付されている。

第1巻はスペイン植民地期初期からアメリカが米西戦争を機にフィリピンに軍事的介入するまでを扱っており、副題に「1571年から1898年5月19日まで」とある。その章別構成は以下のとおりである——「第1章 フィリピンにおけるスペインの占領」、「第2章 反乱の発端」、「第3章 1896年から1897年のフィリピン反乱」、「第4章 パテルロの交渉とビヤクナバト条約」、「第5章 香港委員会とアメリカの支援のもとでのアギナルドの帰還」。ついでこの巻の後半部には、主としてフィリピン革命に関わる1896～1898年の文書の英訳(文書番号1～96)が収録されている。

そして第2巻は、アメリカによるフィリピンへの軍事的介入後から平定宣言の発令までを扱っており、副題に「1898年5月19日から1902年7月4日まで」とある。同巻の章別構成は以下のとおりである——「第1章 スペインに対する反乱の再燃と米西戦争」、「第2章 アギナルドのフィリピン到着、スペインに対する軍事作戦、政府の樹立からマニラの陥落(1898年5月19日から8月14日まで)」、「第3章 マニラに対するアメリカ軍の作戦行動とアメリカ軍と反乱軍(フィリピン側)との関係(1898年5月2日から8月30日まで)」、「第4章 アギナルドによるフィリピンの占領とルソンの状況(1898年8月13日から1899年2月4日まで)」、「第5章 ルソンにおける軍事作戦(1899年2月5日から11月13日まで)」、「第6章 ゲリラ戦争の時代(1899年11月13日から1902年7月4日まで)」、「第7章 ビサヤ地方」、「第8章 反乱政府の財政制度」、「第9章 香港委員会を含む反乱軍の外交関係」。

さらにこの記録史集の資料編にあたる第3～5巻には、英訳されたフィリピン革命政府・革命軍の文書がふんだんに収められている。第3巻は1898年5月19日から1899年2月4日までの時期の文書を扱っているが、実際に同巻に収録された文書は1898年5月19日から1898年8月15日までの文書(文書番号1～512)であり、1898年8月17日から1899年2月4日までの文書(文書番号513～594)は第5巻の末尾に追加されている。そして第4巻には1899年2月5日から1899年11月13日までの文書(文書番号595～990)が、第5巻には1899年11月13日から1902年7月4日までの文書(文書番号991～1430)が収録されている。

なお、第1巻の冒頭には、テイラーが本記録史の原稿とともに島嶼部局長クラレンス・エドワーズに送った送付状が付されており、この記録史集を編纂した経緯を述べたあと、テイラー自身が執筆した歴史叙述について次のように語っている。

私自身の序論〔第1巻と第2巻の歴史叙述——筆者〕は文書事例を提示するための枠組みにすぎません。フィリピンの歴史を研究したすべての人が同意するものではないかもしれません。これは

あくまで私自身の印象を表現したものであり、政府が私の見解に同調していると思なすことはできません (Ibid.: vol. 1, 1-2)。

テイラーは以上のように述べ、続けて彼自身のフィリピン革命政府についての見解を次のように披露している。

アギナルドが樹立した政府は、本来意見を求められるべき人々の願望を代表してはいなかった。彼は強く無口な男で、繊細な頭脳と情熱的な演説によって民衆を巧みに操る才能をもっていた……。アギナルドとその側近たちが予見していた通り、アメリカとの戦争は、フィリピン人の大義をアギナルドの大義と見せかけることになった。だが、実際にはそうではなかった。そして、アメリカ軍が武力によって徐々に国を掌握していくにつれ、民衆は次第に、そしてそれぞれ異なる期待を抱きながら、アギナルドの政府のあとに続いた新たな政府の方がより優れたものであることを理解し始めた。そして、それがより良い政府でなかったとしたら、それこそが不思議なことだったろう (Ibid.: vol. 1, 2-3)。

アメリカのフィリピンへの軍事的介入から平定宣言の発令までを扱った第2巻の各章には、アメリカ軍に対するフィリピン革命軍の執拗な抵抗活動が詳しく記されている。とくに筆者が関心をもった点は、第1にテイラーが描き出した革命組織の象徴的存在としてのアギナルド像であり、第2には、そのアギナルドのカリスマ性が各地でゲリラ戦を展開した革命組織のなかにどのように浸透し民衆を引きつけていたかについてテイラーが掘り起こした文書とその分析である⁹⁾。1901年3月にアギナルドはアメリカ軍に逮捕され、その後革命軍は瓦解するが、1899年2月から1902年7月までの3年以上もの長きにわたって革命軍がアメリカ軍に抵抗し続けたエネルギーの源泉のひとつがそこにあったように思えるからである。以下、そのテイラーの歴史叙述の事例として、上記2点に関わる記述を紹介しよう。

アギナルドはカビテ出身の華人系メスティーソであり、当時のタガログ人たちや周辺の州の人々からは魔法の力をもつ人物と見なされていた。彼は未来を予見することができ、無敵であり、魔法の剣をもっていて、それを振ることで飛んでくる弾丸を跳ね返すことができた。そして彼はカティブーナンの指導者だった。彼は一度もヨーロッパに行ったことがなく、高い教育を受けたわけでもなく、スペイン語もほとんど知らなかった。彼は自分の州の言語であるタガログ語を好んで使っていた。……彼は村の頭であり、民衆の支持によって台頭した人物であったが、「イラストラード」と呼ばれた有産知識階層はそうした民衆を見下していたのである (「第4章 アギナルドによるフィリピンの占領とルソンの状況 (1898年8月13日から1899年2月4日まで)」より) (Ibid.: vol. 2, 175)。

したがって、なぜアギナルドのもとに集まった人々——最初はスペイン人から、次には自国人から略奪することで生きてきた者たち——が降伏を望まなかったのかが理解できる。しかし、彼らが戦いを続けるにはこの国の人々の支持が必要であり、住民全体が絶望的な戦いをなぜ望んだのかは理解しがたい。しかし、アギナルドがゲリラ戦を宣言したとき、すでに多くの人々がこの戦いに疲れ果てていたことを示す証拠は多い。さもないと、武装集団の指導者たちが援助や支援を得るために人々に圧力をかけなければならなかったはずがない (「第6章 ゲリラ戦争の時代 (1899年11月13日から1902年7月4日まで)」より) (Ibid.: vol. 2, 301)。

彼 [アギナルド—筆者] がアメリカに忠誠を誓ったあとも持ち続けていた影響力の程度については、推測の域を出ない。しかし、アギナルドにまつわる伝説が今後形成されている可能性は高く、その伝説は事実を歪めたものであっても、フィリピン諸島の部族たちをひとつのフィリピン民族と

して団結させるうえで、実際に価値をもつことになるだろう。なぜなら彼は彼らの想像力を深く揺さぶったからであり、忠誠心とは常に冷静な打算はなく、感情によって決まるものである。フィリピン人の想像力は、パテルノのような人物によって、あるいはマビニによってさえも掻き立てられなかった。アギナルドこそがこの闘争の主役であり、彼と彼に導かれた人々に鼓舞されたルソンの人々が、自らがひとつの民族になれるかもしれないということを初めて実感したのである。人々は彼のなかに自分たち自身の欠点と美徳の双方を見ていた。そして、たとえ外国人が彼に対してどのような評価を下そうとも、彼には限界や野蛮さがあったとはいえ、フィリピン諸島の大多数の住民の理想を体現していたことは忘れられることはないだろう。さもなければ、3年間も彼らの想像力を支配することはできなかつたはずである。武装も不十分で、弾薬も乏しく、食料も衣服も足りないなかで戦ったフィリピン人たちの勇敢さには、敬意を払わずにはいられない。彼らは祖国のためではなく、指導者たちのために命を捧げたのである。現在入手可能な文書は、そうした指導者たちの人物像と、いかにして彼らが戦争の継続を鼓舞することができたのかをある程度示している（「第6章 グリラ戦争の時代」より）（Ibid.: vol. 2, 313-314）。

ルロイの『フィリピンにおけるアメリカ人』とテイラーの『フィリピンの対米反乱』との決定的な違いは、ルロイがアメリカ政府やアメリカ軍関係の資料に基づきアメリカのフィリピン占領の正統性を評価したのに対して、テイラーの場合は、フィリピン革命政府や革命軍の文書を渉猟することによって、革命政府や革命軍を構成する人々の実像に接近する努力を惜しまなかつたことにある。こうしたテイラーの歴史叙述の手法はアメリカによるフィリピン占領の正統性を保障するものではなく、むしろそれに対する阻害要因と見なされ、アメリカ政府による出版が認められなかつた最大の理由のひとつだつたのではないだろうか。それゆえに、テイラーの『フィリピンの対米反乱』は、収録された膨大な一次資料とともにフィリピン革命史に関する重要な作品のひとつとして、今日においても示唆に富む多くの指摘を含んでいるといえよう。

むすび

20世紀への世紀転換期にアメリカは、一般に米西戦争として知られる帝国戦争のなかでフィリピンを領有し、アジアにおける帝国の形成の足掛かりを構築した。本稿では、アメリカ政府がフィリピン植民地化を正当化していった道筋の事例として、アメリカが押収した通称「フィリピン革命文書」のゆくえを追跡しながら、同文書の編集にあつたジョン・テイラーによる記録史集の出版が頓挫した経緯やその背景などを明らかにした。

そもそも「帝国アメリカとは何か」が議論されてすでに久しい。19世紀を通してアメリカの外交政策の基本は、モンロー主義にもとづく「孤立主義」に置かれ、20世紀に入ってもその中立政策により、第一次世界大戦への参戦は1918年になってからであつた。同大戦中に、ウィルソン大統領によって国際平和機構の設立が提唱され、それを受けて1920年に国際連盟が発足したものの、アメリカは連邦議会の反対を受けて非加盟を貫くことになった。このように広く知られるアメリカの「孤立主義」からみると、アメリカが19世紀末から20世紀を通して、ラテンアメリカやアジア諸地域で展開してきた対外政策を理解することがむずかしくなる。なぜなら、1898年の米西戦争を起点として、アメリカは帝国主義列強のひとつとして対外膨張の道を歩んできたからである（永野2020）。

キューバをめぐるアメリカとスペインとの間で展開された米西戦争は、同時にフィリピン領有をめぐる植民地獲得戦争でもあつた。林 義勝『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争——マッキンリーと帝国への道』（林 義2020）によるように、世紀転換期のキューバとフィリピンで展開された帝国戦争をひとつの歴史的場としてアメリカの姿を眺めると、何が見えてくるのだろうか。ひとつには、一般的に世界史や国際関係史のなかで議論されるようなアメリカの「孤立主義」とは、基本的にはアメリカが主権国家として対等の立場で外交関係を構築することをめざした西欧世界において展開され

たものであり、非西欧世界では、ヨーロッパ列強諸国と同様に対外膨張を意図し、またそれを実践することであった。

この意味で、フィリピン革命期に展開されたフィリピン・アメリカ戦争とは、20世紀初頭にアメリカがアジアで帝国としての地位を獲得するための帝国戦争であり、そのためにはアメリカ政府によるフィリピン統治の正当化が必須の状況となっていた。本稿で取り上げたフィリピン・アメリカ戦争の記録史をめぐるさまざまな動きは、そうした政治的状況におけるひとつの歴史論争と位置づけることができよう。

(ながの よしこ 客員研究員 神奈川大学名誉教授)

注

- (1) フィリピン革命史研究として、(池端 1987) と (池端 2022) を参照。なお、フィリピン革命へのアメリカの介入については、(林 2020: 第3章と第4章) を参照。
- (2) 恩恵的同化政策については、(永野 2011: 163-167) をみよ。
- (3) この件については、フィリピン国立図書館のカタログ及び筆者による同図書館への電子メールによる問い合わせに対する回答 (Office of the Director, National Library of the Philippines, October 20, 2024) によっても確認した。
- (4) テイラーの略歴については、(Alger 1974: 170-172) を参照。
- (5) テイラーによれば、1903年6月の時点で、彼のチームは翻訳および精査のために選定した文書を2034のフォルダーに収めた。各フォルダーには1通から12通の文書が含まれており、選定された総文書数は1万2204点に及んだという (Farrell 1954: 391-392)。なお、テイラーの記録史集についての近年の研究として (Sy 2018) を参照。同論文では、テイラーが記録史集に収録した文書の分類方法や傾向についての予備的調査を行っている。
- (6) ジェームズ・A・ルロイの詳しい経歴については、(Taft 1970: vol. 1, ix-xi)、(Coleman 1970: vol. 1, viii-xxviii)、(Gleeck 1996)、(Cano 2013) を参照。
- (7) ルロイのテイラーの記録史についてのもうひとつの批判的論考として、(Gate 1985) を参照。
- (8) アメリカの「反帝国主義同盟」や反帝国主義の活動について詳しくは、(Legaspi 1973)、(大井 2017)、(林 2020: 第5章) を参照。
- (9) テイラーの記録史を引用した、アギナルドのカリスマ性の指摘については、(池端 2022: 263) をも参照。ただし池端は、アギナルドの革命政府は機会主義的な性格をもち、統率力が欠如し、確固たる革命思想が確立していなかったとして批判的に捉えている (同上: 280-281)。

参考文献

- Alger, Philip L. (1974) "Colonel J.R. M. Taylor (1865-1949)" *Tales of My Life and Family*, [Schenectady? N.Y.]: Argus-Greenwood, Inc.
- Cano, Glòria (2013) "The Americans in the Philippines and the History of Spanish Rule in the Philippines," *Philippine Studies: Historical and Ethnographic Viewpoints*, vol. 61, no. 1.
- Coleman, Harry (1914/1970), "Biographical Sketch: James Alfred LeRoy," IN *The Americans in the Philippines* by James A. LeRoy, vol. 1.
- Constantino, Renato (1971) "Historical Truths from Biased Sources" IN *The Philippine Insurrection against the United States* by John R. M. Taylor, vol. 1.
- Farrell, John. T. (1954) "Abandoned Approach to Philippine History: John R. M. Taylor and the Philippine Insurrection Records," *The Catholic Historical Review*, vol. 39, no. 4.
- Gates, John M. (1985) "The Official Historian and the Well-Placed Critic: James A. LeRoy's Assessment of John R. M. Taylor's 'The Philippine Insurrection against the United States,'" *The Public Historian*, vol. 7, no. 3.
- Gleeck, Lewis E. (1996) *Nine Years to Make a Difference: The Tragically Short Career of James A. LeRoy in the Philip-*

- pines*, [Manila]: Loyal Printing.
- Legaspi, Edelwina C. (1973) *The Anti-Imperialist Movement in the United States, 1898-1900*, Quezon City: University of the Philippines.
- LeRoy, James A. (1905) *Philippine Life in Town and Country*, New York and London: G.P. Putnam's Sons.
- LeRoy, James A. (1914/1970) *The Americans in the Philippines: A History of the Conquest and First Years of Occupation, with an Introductory Account of the Spanish Rule*, 2 vols., Boston: Houghton Mifflin; New York: AMS Press (reprint).
- "Philippines (05/07) US. Department of State, Diplomacy in Action" (2017). <https://2009-2017.state.gov/Philippines/05/07/v/outofdate/bgn/philippines/85081.htm> (最終アクセス 2025 年 3 月 21 日)。
- Scott, William Henry (1984) "Amor Patrio in the Philippine Insurgent Records," *The Journal of History*, vol. 28-29, no. 1-2.
- Sy, Nicholas Michael C. (2018) "John Taylor's *Philippine Insurrection against the United States*: A Preliminary Digital Interrogation of the Archivist," *Philippine Social Science Review*, vol. 70, no. 1.
- Taft, William H. (1914/1970) "Introduction," IN *The Americans in the Philippines* by James A. LeRoy, vol. 1.
- Taylor, John R. M. (1971) *The Philippine Insurrection against the United States: A Compilation of Documents with Notes and Introduction*, 5 vols., Pasay City: Eugenio Lopez Foundation.
- U.S. National Archives and Records Service (1967) *Philippine Insurgent Records, 1898-1901, with Associated Records of the United States War Department, 1900-1906*, National Archives Microfilm Publications, Pamphlet Accompanying Microcopy No. 254, Washington, DC: The National Archives, General Services Administration.
- "Virtual Philippine Revolutionary Records" (2017). <https://web.archive.org/web/20071218052023/http://www.filipiniana.net/prr.jsp> (最終アクセス 2025 年 3 月 21 日)。
- 上野美矢子 (2015) 「フィリピン革命第 2 フェーズにおける領外活動から見た崩壊の過程——フィリピン、香港、スペイン、アメリカ、日本」東京大学博士 (文学) 論文。
- 池端雪浦・生田滋 (1977) 『東南アジア現代史 II フィリピン・マレーシア・シンガポール』山川出版社。
- 池端雪浦 (1987) 『フィリピン革命とカトリシズム』勁草書房。
- 池端雪浦 (1994) 「東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所のフィリピン関係コレクション」『東南アジア：歴史と文化』。
- 池端雪浦 (2022) 『フィリピン革命の研究』山川出版社。
- 大井浩二 (2017) 『米比戦争と共和主義の運命——トウェインとローズヴェルトと《シーザーの亡霊》』彩流社。
- 永野善子 (1995) 「歴史的背景」綾部恒雄・石井米雄編『もっと知りたいフィリピン 第 2 版』弘文堂。
- 永野善子 (2011) 「象徴天皇制とホセ・リサールの神格化との比較考察」藤原帰一・永野善子編著『アメリカの影のもとで——日本とフィリピン』法政大学出版局。
- 永野善子 (2020) 「書評：林 義勝著『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争——マッキンリーと帝国への道』彩流社」『読書新聞』3463 号 (9 月 12 日)。
- 林 義勝 (2020) 『スペイン・アメリカ・キューバ・フィリピン戦争——マッキンリーと帝国への道』彩流社。

